

「スケルトニクス」をめぐって テューダー朝初期の詩人の文体

塩 田 勉

目 次

1. 初めに
2. スケルトニクスをめぐる諸説
3. 中産階級読者層とスケルトニクス
4. スケルトニクスの文体特徴
5. 結 論

1. 初めに

ジョン・スケルトンは、1460年頃生まれ1529年に世を去った、イギリス・ルネサンスの詩人である。彼が創始したと言われる、スケルトニクスと云う、不規則で荒々しい、しかし生彩に富んだ手法は、その起源をめぐって様々な説が出されて来た。

スケルトニクスが、スケルトン以後、後継者が現われなかったこと、スケルトニクスと対照的な、ライム・ロワヤルをなぜスケルトンは、生涯併用したかという文体上の分裂の謎、その起源に決定的な説明がないことなど、スケルトニクスをめぐる問題は多い。本論は、読者層と聴覚性という二つのファクターを導入して、この問題にいくばくかの光をあててみることを目的としている。

2. スケルトニクスをめぐる諸説

スケルトニクスをめぐって、いろいろな起源論が出されて来たが、その学説史を簡単に後づけておきたい。入手できない論文もあるので、充分紹介出来ない説もあるが、一応代表的なものを並べてみる。

1882年、J. シッパーは、その韻律史の中で、スケルトニクスを、中世頭韻詩の長い行が、途中の押韻の節の所で半分に分かれたとして説明した。¹⁾

1907年、F. ブリーは、中世ラテン語聖歌の統唱の中に、短行、同押韻の積み重ね、同じ行頭語の反復、頭韻などの特徴が見い出されるとして、スケルトニクスの起源と断定している。特に、スケルトンの書いたジョン・ジェイバードの30日間ミサのラテン語と比較を行なっている。²⁾

1910年、G. センツベリーは、韻律史の中で、中世末期、語尾音のeが消失し、詩脚の概念も忘れられた結果、八ないし十音節の詩行が、リズム感を喪失して、詩的效果を失ってしまった。詩らしきを出すために残された手段は、押韻だけとなり、ホックリーブやホーズよりも、この不備を鋭く自覚したスケルトンが、意図的に狂詩体(doggerel)を使ったのがスケルトニクスだとした。³⁾

同じ年、S. リーは、15世紀のフランス語にあるマーシャル・ド・パリ(1440-1508)のドッグ・トロットの調子がスケルトニクスを育んだとしている。

1920年、J. M. バーダンは、J. トレヴィサによる「諸国年代記」（原作者 R. ヒグデン、14世紀前半）のラテン語からの英訳（1387）を更に W. キャクストンがモダナイズした版（1482）の訳に、スケルトンの文体に類似するものを認めている。⁴⁾

1935年、W. H. オーデンは、スケルトニクスが、口語の自然な滑らかさを持つとして、童謡、即興詩、ジャズの歌詞と比べ、スケルトンは話すように書いたのだと詩人らしい指摘を行なった。⁵⁾

1938年、L. J. ロイドは、スケルトニクスをスケルトンの創造としながらも、よく似た詩法は、中世の核心から生れたもので、中世ラテン語のゴリアード詩群（ロイド自身は、ゴリアードという用語は使っていないが）に見い出せると語っている。⁶⁾

1939年 W. ネルソンは、更に、ロイドの考えを広げ、中世精神の現われとも言える押韻散文 (reimprosa) の伝統にスケルトニクスの発祥を求めている。古くは、押韻散文は、ὁμοιοτέλευτον（同音終止法）とか *similiter desinens*（同じに終る法）と呼ばれるレトリックの技法で、それが中世ラテン語散文としても、スケルトニクスとしても花開いたのだと説明する。ブリーの中世ラテン語聖歌説もこのコンテキストに入れられる。そして、英語として表われた例として、アスカムやモア、A. ボード、J. ブラドフオースなどの文例を引き合いに出して論証している。これは、この時迄に書かれた最も詳しく説得力に富む説である。⁷⁾

1943年、I. ゴードンは、中世英語の頭韻詩起源説を出したが、これは、半世紀前のシッパーの説と同じである。⁸⁾

1948年、詩人 P. ヘンダソンは、ゴリアード説を精神的影響として認めながらも、その本質は、口語英語の強勢リズムにあると述べている。これは、オーデンと同系統の詩人らしい直感的な意見であろう。⁹⁾

1949年、H. L. R. エドワーズは、スタンダードになった評伝の中で、ネルソンの説を入れながらも、中世ラテン語のレオ詩体にその起源を見ることも出来るとし、複数起源説を提示した。¹⁰⁾

1953年、R. S. キンズマンは、「^{しやれこうへ}嚮嚮によせて」という従来より初期の作品にスケルトニクスの萌芽を見出し、「死の徴証」のテーマをあつかった中世英詩・ラテン語詩に同種の手法が認められることを指摘した。¹¹⁾

1954年、C. L. ルイスは、パナティン手稿などにあるスコットランドのコミックな詩歌に、スケルトニクスと同じ傾向をさすがに認め、今では、消滅してしまった共通の伝統から下層向きの詩形がスコットランドとイギリスで生れたのではないかと推測している。¹²⁾

1961年、A. R. ハイザーマンは、スケルトンの作品とサタイアの伝統の関係について調べ、スケルトニクスは、サタイアの目的に適合した常套的な語法の一典型であると考えた。したがって、スケルトニクスは、サタイアの目的に奉仕するために選ばれた一手段であって、その根源は、西暦1500年以前のサタイアの言語にあると見ている。¹³⁾

同じく1961年、S. B. ケンドルは、中世英語の詩には、スケルトニクスと同じリズムを具現した多くの詩だけではなく、スケルトニクスと等価の定型すら見い出せると結論している。スケルトニクスは必ずしもスケルトンの専売ではないというわけである。しかし、この説もすでにシッパーが前世紀に出したものである。¹⁴⁾

1962年、M. ポレは、スケルトニクスの発祥を、キンズマンのように初期の作品群の中に見い出し、特に、「嚮嚮によせて」では、短い、韻に富んだラテン語の聖歌や連禱に親し

んでいたバイリンガル（拉英）の僧侶詩人が死の観想の中で無意識に使ったものであると説明している。¹⁵⁾

ポレは、更に、今までの学説史から見て、スケルトニクスは、僧職にまつわるラテン語の聖歌、祈禱文などに関りがあるとし、スケルトニクスが、ディスの司祭時代に開花するのにも由あることだとしている。

またポレの脚注によれば、この他中世ノルマンの詩連、イタリアのプロットラ、フランスのフラトラジー、ラテン語と英語の混交体などの諸説が、パイルの論文（1936）にあると記しているがこれは未見である。

ポレは更に、スケルトニクスは、不用意さの産物ではなく、詩的靈感の命ずる所に従った結果であり、その靈感を記すための「速記術」であったと結論づけている。¹⁶⁾

1965年、S.E.フィッシュは、スケルトンの創作活動を、中世からルネサンスに過渡する特殊な歴史的瞬間の精神史として扱った。スケルトンは、旧教的世界に本質的共感を示しながら、その墮落した世相には反発した。また迫り来る宗教改革と絶対王政の確立期に本質的に異和感を感じつつも、それをリアルに映し出すために詩法の改変を迫る自己の芸術的靈感には忠実であろうとした。スケルトンは、このため、俗世に深く掛わり合おうとする衝動と、それを避けようとする気持の間に、つまり、旧教的宗教者の使命と、近代的詩人の直感の間に不断の緊張を孕むことになった。現世に自己がまき込まれれば、文体は、平明体となり、現世から遠ざかろうとすれば、文体は、雅文体となった。

スケルトンは、このどちらにも解消すれば嘘になる自己の状況を、平明体と雅文体のコントラストとして扱って表現しようとした。この複雑な原点から後退すると、陳腐なアレゴリーか、中立的な絵や、怒りに単純化されたスケルトニクスを生むことになる。

スケルトニクスも雅文体との桔槔関係において、スケルトンの心の現実を写し取れるので、そのバランスを捨てれば、「エリナ・ラミングの酒造り」のような絵に終らざるをえない。

したがって、スケルトニクスだけを単純に取り出して論ずるのは、スケルトンの全体像を見失うものでしかない。フィッシュは、以上のように考えた。¹⁷⁾

以上が学説史の概観であるが、それが迎って来た道は、スケルトニクスを、個々の詩人や技法からの直接的影響として短絡的に捉えるよりは、次第に中世的伝統——サタイアや、ライムプローザやゴリアード的精神——と風土の中で理解し、更に、スケルトニクス一色でスケルトンを塗りつぶすのではなく、スケルトンの全作品の歴史の中にスケルトニクスを位置づけ、更に当時の特殊な歴史的状況と連関させながら解明させる方向であったと言えよう。

特に、センツペリーの「意図的狂詩体」¹⁸⁾という指摘、ロイド、ネルソン、ポレなどの中世ラテン語や旧教宗ラテン語の風土との結びつき、ハイザーマンのサタイアの伝統の中で、また、フィッシュのスケルトンの精神史の中でのスケルトニクスの位置づけなどは見逃せぬ重要な到達点である。

しかし、見落されている点がないわけではない。それは、スケルトンを取り巻く歴史的状況のうち、彼の読者層（あるいは聴衆）の歴史的的特殊性とそこから結果される詩の聴覚的傾向である。

何人かの学者が発見しているように、スケルトニクスに類似する詩法は、同じころのイタリア、フランス、スペイン、スコットランドに発見されている。¹⁹⁾そして相互的影響の全くなかったスペインのファン・デル・エンシーナなどのようにスケルトンに酷似している例もある。²⁰⁾筆者は、したがって、スケルトニクスを、印刷術と中産階級の読者層の成長という歴史

的コンテキストの中で起きた現象として捉える必要があるように思う。

言うまでもなく、スケルトニクスをスケルトンたらしめたのは、スケルトンの個人の資質と伝記的事実の持つ偶然的要素（例えば、デイスに十年近く僧侶として居た²¹⁾こと）に依る所が多いが、内在的アプローチは別の論文に譲ることにし、本論では、マクロのコンテキストで問題を考えてみたい。

3. 中産階級読者層とスケルトニクス

スケルトニクスの発生と性格を考える際にこの特殊な過渡期の重要なファクターである中産階級読者層（あるいは聴衆）の形成を考慮する必要がある。ヨーロッパの歴史で、第一次大戦を別にすれば、宗教改革を伴うこの時代の変革程、決定的影響を文学に与えた時期はないであろうから、²²⁾その特殊性をしっかりと理解しておく必要がある。

当時は、中産階級の形成期であった。中産階級は、エンクロージャーを背景にして商業化がすすみ、富力が増すにつれて、国政に参加するようになる。その背景には、教育の普及によって識字層が増え、支配層以外の文化的要求の水準が次第に上がってくる経過がある。彼らは、ラテン語を知らず、英語でものを読むことを欲した。教育と出世が結びついたから学習意欲は盛んであった。こういう事情からラテン語聖書の英訳化が起り、それは宗教改革という教会機構の民主化や宗教的良心の近代化と結びついて、庶民の間に広まって行った。

一方、1476年、キャクストンによって印刷術が導入された。しかし、このことは、直ちに中産階級の読者の増大と結びつけるわけにはいかない。というのは、キャクストンは、オランダで活躍した商人であり、当時オランダは、フランスのバーガンディ公国の一部を成していたため、キャクストンが選んだ作品はバーガンディ宮廷の嗜好を強く反映し、ヒューマニズムに背を向けた退嬰的な作品が多かった。キャクストンは、バーガンディ宮廷に人気のあったフランス語の作品を選んで翻訳し、ヨーロッパの最先端の文学趣味として、テューダー朝の宮廷に売り込んだのである。文体も、貴族の気に入る雅文体が使用された。キャクストンが印刷した百冊余りの本の大部分は、こうした翻訳であるが、多少、実用書もある。それは、法文集や宗教書、レトリックの本などいずれも僧侶、貴族などを対象としている。

純粹に中産市民層向けのものは、商人や学童向けの語彙集ぐらいのものであった。言うまでもなく、「カンタベリー物語」や「アーサー王の死」、「イソップ物語」のような作品は、中産階級の読者にも読まれたに違いないが、いわゆる民衆の興味と嗜好に基づく「大衆向け」の作品として出版されたわけではなかった。大衆読者の趣味が宮廷の嗜好に先導され宮廷化するのには、シドニーやスペンサーの時代になる。²³⁾

こういう印刷術初期の時代における庶民読者²⁴⁾は、したがって、充分洗練されない趣味を持ち、視覚的なメディアとしての長文の雅文体や複雑なシンタックスには馴染が薄かったに違いない。知識欲にもえる庶民の趣味と興味に答えてくれる作品がまだ充分印刷されないという状況があったと言えよう。

こうした潜在的庶民読者層の過渡的特性として考えられるのは、聴覚的傾向である。彼らはまだ、僧侶や貴族のように視覚的メディアとしての活字によって感性を方向づけられる以前の状態にあったと言えよう。彼らは、教会の説教という口語をとおして聖書に触れたのであり、吟遊詩人や宗教劇という語られる言葉をとおして文学を理解したのである。したがって、活字メディアとは異なる、一過性の音声メディアの持つ形式と発想は易しく受け入れたが、活字メディアの特性である、構築的シンタクスや、抽象的概念やイメージを受け入れ

る素地は充分育ってはいなかった。

個室（これもルネサンスの産物である）の中で活字と向い合いながら内省的に読むのではなく、教会や祭や、村の広場で集団的に聴くというのが彼らの文学への接し方であった。

耳から一度聴くだけであるから、現実を離れた哲学や神学の議論は理解できない。内容は、あくまでも現実的、具体的でなければならない。それは、庶民の生活感覚に支えられ、裸で飾らない、直接的な内容でなければならなかった。

中産階級が貴族化して、趣味が一時的にせよ宮廷化するのには、スペンサーの傾であって、それ迄、この極めて現実的な庶民読者層の要求を満たす作品は、文学史上ほとんど重視されていないパンフレット文学の形で現われた。それは、庶民の生活の現実と直結した形で現われたから当時の社会問題に対する抗議が多かった。その内容を大別すると、腐敗した教会のモラルへの批判、ローマン・カトリック教会の支配に対する国粋主義的な独立運動、エンクロージャーによる土地破壊に対する抗議と賛同意見、インフレによる貧困化とその結果としての乞食の蔓延を嘆く声などである。²⁵⁾

これらの内容は、庶民の生の声の反映であり、庶民の趣味と庶民の文体によって語られた。庶民はまだ教育の程度が低かったから、理性よりは、感情に支配されやすく、その感覚は大づかみで荒っぽく、デリケートな言い回しを理解せず、直接的で「エゲツナイ」言い方を好んだ。

こうした大衆的パンフレット文学は、新教と旧教の論争を含み、世論の形成と、それをおしての思想の一般化を押し進めることになった。

これらの執筆者には、当然文字を知っている僧侶が多かったが、理由はそれだけではなく、僧侶が、宮廷の貴族とは違い教会を通して教区の庶民と直接交わり、告解をとおして庶民の生の声を聞き、四季おりおりの宗教的行事を庶民と共に営み、病院を経営して庶民を手当し、庶民から妾を取って子供をもうけ（当時ありふれた習慣）、庶民と共に酒場に入出入りするような生活を送っていたからである。上級僧侶も元は下級僧侶として多少ともそうした生活を送ったに違いない。

スケルトンの場合も例外ではなかった。彼は、宮廷詩人として出発したが、約十年間、宮廷を退き当時最もエンクロージャーが進み、毛織物業の盛んな中産階級の生命力と活気に満ちた地方、ノーファクのディスの司祭を務めた。スケルトンは、そこで、妾を取り、子供をもうけ、自ら畑をつくる生活を送ったのである。

そして、代表的スケルトニクスは、この時代から開花したことを忘れるわけにはゆかない。スケルトニクスによって書かれた作品は、いずれもコミカルな庶民的要素の強いもの²⁶⁾か、当時の教会批判²⁷⁾、ウルジーの政治批判²⁸⁾、新教批判²⁹⁾、そして庶民生活の描写を³⁰⁾あつかっている。それらは、大衆の声であって、スケルトンのサタイアの大胆さは、大衆の代弁者であるという自負に支えられているからである。

スケルトンは、教会や、宮廷の使用人向けに、耳から聴いてすぐわかるような生き生きした文体すなわちスケルトニクスで、当時の庶民の生活に直結した問題を扱った。

このことは、スケルトン自身が中産階級の出身であり、庶民の多くと、ウルジーの悪政や新教に対する批判を分かち合っていたことも無関係ではない。しかし、成り上り者である中産階級出身者には、上流階級に自己を同一化しようとする傾向も持っていたから、ヘンリー八世や、自分の庇護者であるハワード家やパーシー家の人たちなどの宮廷人を読者としたときは、スケルトニクスを捨てライム・ロワヤルで書いた。したがって、スケルトニクスは、庶

民読者を意識した文体であり、スケルトン自身の趣味の悪さとして片づけられない面を持っている。そこにある深さと洗練性の欠如は、庶民読者層形成の未発達な段階における特殊性として理解すべきであろう。むろんスケルトンの作品全体に見られる粗野なところは、当時の言語事情によるところも大きいことは論を俟たない。

しかし一般的にはスケルトンにおける雅文体と狂詩体スケルトニクスの分裂は、印刷術が十分に普及して読者層の感覚が統一されてゆく以前の状態を反映しているのである。その統一は英訳聖書の一般化まで遅れた。³¹⁾

スケルトニクスが大衆文学のはしりであることは、スケルトニクスの模倣者に、先にあげた大衆文学的作品が多いことからわかる。例えば、「天声人語」³²⁾は、一般庶民の貧困を訴えたスケルトニクスによる作品で、長い間スケルトンの作品と考えられていたものである。その他枚挙に暇がないが、W. ロイと J. パーロウの作品(1528)は、ウルジー批判を行なったスケルトニクスの作品であるし、やはり庶民と係り深い初期の劇なども1530年代にスケルトニクスで書かれたものがある。³³⁾

スケルトンは、こうして庶民の生活感覚をスケルトニクスで代弁したが、このことは、スケルトンの英語に対する態度からもうかがえる。スケルトンは、モアのように貴族化した中産階級出身者が書くラテン語だけの作品をほとんど書かず専ら英語で書いた。しかし、当時の英語は、語彙も少なく、上流の趣味に合わないところもあった。スケルトンも、英語が、「田舎臭く、腐って、ひねくれて、退屈な言葉で美文は書けない」³⁴⁾とこぼしているが、同時に、「英語の方が文章に力がある」³⁵⁾と言い、「坊さんにはラテン語がいいが、英語の方が良い人だっている」³⁶⁾と英語に希望を託している。また、スケルトンはチャーサーを愛し同好の士と読書会まで開いていたが、チャーサーの言葉は、「明らかで、気持よく、易しく、平明だ」³⁷⁾と評している。

これは、同時代人のホーズなどの英語に対する否定的態度に比べて楽観的であり³⁸⁾民衆の言葉である、平易な英語への信頼を現わしている。

それでは、こうして庶民の読者と結びついたスケルトニクスはどんな文体であったのか。以上の議論から察することが出来るように、それは庶民読者層の印刷術以前の感覚傾向——すなわち視覚的メディアの特性とは異なる聴覚的傾向によって強く条件づけられていると言ってよい。つまり、スケルトニクスは、読まれることよりは聴かれる効果を期して形づくられた文体である。それは、音楽の形式の持つ特性を持ち、眼ではなく耳によってより効果的に認識される手法を意識的に多用する。読む時の記憶時間より短かい一過性の記憶時間に耐えられるような解りやすい具体的内容と、反復と、聴く者の意識の流れに共鳴して流れ出す時間芸術の特性をより豊富に持っている。

こうした聴覚的な庶民の認識傾向を中世から近世の入口まで育んで来たものは、教会の音楽であり、ミサであり、聖歌であり、説教であったことは言うまでもない。それらもまた、聴かれるためのものであったから、ラテン語であっても次第にスケルトニクスと似た様相を帯びて来ても不思議ではない。スケルトニクスの起源を中世の聖歌や俗謡などの宗教に関わるラテン語文献に求める学者が多いのは、³⁹⁾相方とも聴覚的形式で書かれているからである。

スケルトニクスにおける音楽的傾向は、スケルトン自身が音楽好きの合唱団員であったという伝記的事情によっても助長された。詳しいことは省くが、作中にミサを引用したり、俗謡やグレゴリア聖歌を挿入したり、ドレミを使って聖歌の一節を再現したり、その他音楽用語の多用が目立つ。大学入学以前に音楽学校を出たのではないかという説もある。⁴⁰⁾

以上のような観点から、スケルトニクスを眺めたとき、スケルトニクスの持つ様々の文体特徴の必然性が了解されるであろう。そして、エリザベス朝に入るとスケルトニクスの人気は急に衰え、二十世紀になって、第一次大戦後オーデン、グレイヴズ、⁴¹⁾ブランデン、⁴²⁾P.ヘンダソン、R.ヒューズ、⁴³⁾E. & Q.シットウェル、⁴⁴⁾J.C.ランサム、⁴⁴⁾E.M.フォースター⁴⁵⁾らによって再評価と模倣がなされるまでは、ほとんど悪いお手本としてしか名前があげられなかったことにも理解がいく。なぜなら、印刷術が広まって、一般読者の趣味が宮廷化し、文学の文体が聴覚メディアとしてよりは、視覚メディアとして定着して、読者の感性の形式が時間的音楽型から、空間的活字型に変わったため、スケルトニクスの持つ性質が理解されなくなってしまったからである。以後、西洋文明は、活字型の文明を発展させ、その頂点が第一次大戦によって崩れ去り、全く別の角度から聴覚的想像力の復活が説かれるようになるまで、文学としてのスケルトニクスは眠りつづけたと言ってよかろう。

それでは、スケルトニクスは、具体的には、どんな文体か。詳しい例証は、発表済みなので、ここでは、そのアウトラインを記し、それが庶民文学のテーマにどう結びついていたかを瞥見しておきたい。

4. スケルトニクスの文体特徴

スケルトニクスの文体特徴は、代表的なものとして、延展性、反復性、伸縮性の三つがあげられる。

延展性とは、文章に、ペリオディック・センテンスのような意識的な終結のサスペンションがなく、言葉が尽きるまで、文章をどこまでも伸ばしてゆく傾向である。これは、中世のレトリックのアンプリフィカティオ⁴⁶⁾の実践でもあるのだが、単なる美文のレトリックであったものが、ここでは聴覚的に条件づけられた読者の理解に奉仕する目的で使用されている。代表的な実例をあげたい。

a) 羅列

What can it avayle
To dryue forth a snayle,
Or to make a sayle
Of an herynges tayle:
To ryme or to rayle,
To write or to indyte,
Eyther for delyte
Or elles for despyte;
Or bokes to compyle
Of druers maner style⁴⁷⁾
.....

Some brought walnutttes,
Some apples, some peres,
Some brought theyr clyppynge sheres,
Some brought this and that
Some broust I wote nere what,

Some brought theyr husbaudes hat,
Some padynges and lynkes,
Some trypes that stynkes.⁴⁸⁾

b) 修飾句などの継続的追加

これは、修飾句を後へ後へとつなげてゆくやり方で、シンタクスは重心を持たず、聴く者の意識と共に、フーガのように循走する。

For they wyll haue no losse
Of a peny nor of a crosse
Of theyr predyall landes,
That cometh to theyr handes,
And as farre as they dare set,
All is fysshe that cometh to net:
Buyldying royally
Theyr mancyons curiously,
With turrettes and with toures,
With halles and with boures,
Stretchynge to the starres,
With glasse wyndowes and barres;⁴⁹⁾
.....

延展性は、このように、少しずつ短く区切られた意味を先へ先へと加えてゆく性質で、これは、内省的時間を持つ、活字型のメディアではなく、後戻りをせず、先へ先へと利他的に聴く者の意識に乗って動いてゆく聴覚型メディアの特徴である。活字メディアによる内省的思考訓練の期間の短い当時の庶民は、こういう文体を好んで受け入れたのである。

反復性は、先にあげた例の中にも見い出されるが、それは、音のレベル(韻)、単語レベル、文法レベル、意味のレベルにわたって系統的に行なわれる。一つの語の上に意識の集中する時間が短い聴覚型メディアは、必然的に反復の傾向を獲得する。それによって聴く者の印象と記憶を強めるのである。

音の反復としては、延展性の所に上げた韻の繰り返しが見られるところに見られ、スケルトニクスを性格づける重要なファクターとなっている。単語レベルでは、既出の例にあるような行頭語の反復が顕著で随所に見られる。文法レベルでも同じで、単純な例では、

He cryeth and he creketh,
He pryeth and he peketh,
He chydes and he chatters,
He prates and he patters,
He clytters and he clatters,
He medles and he smatters,⁵⁰⁾
He gloses and he flatters;

のように頭韻と並用して単文を繰り返している。

意味的反复としては、「エリナ・ラミングの酒造り」にあるような、醜女のポートレートを重ね合わせてゆく例がある。また「返答の辞」の新教徒を攻撃の悪罵のように、言葉を変えただけで、意味は呪咀一色に近いような例もある。

With baudrie at her [=Virgin Mary] ye brayed;
With boudy wordes vnmete
Your tonges were to flete;
Your sermon was nat swete;
Ye were nothyng discrete;
Ye were in a dronken hete.⁵¹⁾

こうした反复は、保守系政治家の名調子の演舌や、講談調のようなリズムで庶民を魅了したことであろう。スケルトンのこうした腕は、反ルター戦線の論陣に買われ庶民を説得するために使われたようである。

伸縮性は、同じ脚韻反复の回数を伸縮させたり、文章の長さを一行、半行、二行とかなり断続的に変化させる性質である。また、一行のシラブル数を自在に変えて、ストレスの数を二拍にしたり三拍にしたり⁵²⁾またラテン語を交じえて急に文章の調子を変えたりする⁵³⁾これらの手法は、詩人の意識を流れる感情をモーフォロジーにおいて把え再現するのに役立っている。⁵⁴⁾長いので引用は出来ないが、「雀のフィリップ」のジェイン・スクロップへの贅辞の部分⁵⁵⁾の行の長さの微妙な変化や、最終連に見られる比較的長いラテン語の行などは、詩人の感情の起状を写し出している。

また、「なぜ宮廷に戻らぬか」⁵⁶⁾の同脚韻数の変化の一部を示すと、12-3-2-2-2-7-3-6-6-3となっており、ウルジーに対する作者の思想や感情が思想の定義によるよりは、心のモーフォロジーとして、思想の形として表現されている。衆知の話題の使用によって読者が思考する必要を最小限に抑えて、感性的形の方を伝えるための努力がここにも読み取れる。

以上あげたようにスケルトニクスは、いずれも、聴覚的メディアの特性を多く持っている。それは、一言で言えば、思想を思想としてでなく感性的な形として伝える傾向であると言ってもよい。無論言語である限り、意味性は最後まで消えないが、スケルトンは、既知の題材をあっかうことによって、新情報の説明や定義などの伝達上の手間を省き、その題材に関して庶民と分ち合った感情と、その動き様として現われる思想の形を聴覚的に再現したのである。

したがって、思想書の持つ線的論理による伝達ではなく、次々に音的映像によって限取られた言葉を、脈絡には無頓着に重ね、それが聴く者の意識の中で線としてでなくマスとして蟠まり、その量によって全体を直感させるといふ伝達方式をスケルトンは用いている。

これは、人生の目的や、合目的性が、キリスト教によって外から支えられ、そうした整合性、齋一性を一際、神まかせにして、自己の内面のインテグリティとしては問題にしなかった中世人の発想の結果でも原因でもあると言えよう。自己の内面の時間で全てを測り直し、時間的論理という体系に再構成する近代的意識は、スケルトンにおいてははまだ未発達である。そういう未発達な庶民の意識が、まだ日の浅い活字文化と並存した短い時期に、束の間の開

花を見せたのがスケルトニクスであったと言ってよからう。

今あげた三つの文体特徴は、空白の面白さを知らず、省略の技術とも無縁な中世的特色を持ってはいたが、⁵⁷⁾それらの中世的技術を徹底的に駆使することによって、速さと伸縮自在性という、硬直した中世のアレゴリにはなかった柔軟性を獲得しものごとをよりリアルに把握する技術を編み出した。それは中世になり切った点で中世ではなくなる消失点を画する事件であった。スケルトニクスは最も中世的である点において最も中世的ではない詩人であったと言えよう。⁵⁸⁾

5. 結 論

本論は、スケルトニクス解明のために、読者層と聴覚性のファクターの導入の必要性を説いた。それらが、スケルトの内面によって、どのように媒介されたかが問題になってくる。フィッシュの論文⁵⁹⁾が最も鋭い切り込み方をしているが、歴史との関連は極めてジェマティック⁶⁰⁾であり、より総合的解明が今後の課題とならう。

(1976.9.29)

早稲田大学助教授 (英文学)

註

1. J. Schipper, *Englische Metrik* (Bonn). *History of English Versification* (Oxford, 1910) p.115
2. F. Brie, "Skelton Studien", *Englische Studien*, XXXVII, pp.81-82
3. G. Saintsbury, *Historical Manual of English Prosody*, pp. 104-107
4. J. M. Berdan, *Early Tudor English Poetry* (New York), pp. 168-170
5. W. H. Auden, "John Skelton" in *The Great Tudors*. Edited by K. Garvin. (London), p.63
6. L.J. Lloyd, *John Skelton: A Sketch of His Life and Writings*. (Oxford), p.54. See also G. W. Whichel, *The Goliards Poets*, (A New Direction pbk.)
7. W. Nelson, *John Skelton, Laureate*. (New York) pp.82-101
8. I. Gordon, *John Skelton, Poet Laureate*. (Melbourne and London), p.194
9. P. Henderson, (ed.), *The Complete Poems of John Skelton, Laureate*. (London), p.v
10. H.L.R. Edwards, *Skelton: The Life and Times of an Early Tudor Poet*. (London), pp.87-89
11. R.S. Kinsman, "Skelton's 'Uppon a Deedmans Hed': New Light on the Origin of the Skeltonic," *Studies in Philology*, pp.101-9
12. C.S. Lewis, *English Literature in the Sixteenth Century, Excluding Drama*. (Oxford), p.136 (Paperback)
13. A.R. Heiserman, *Skelton and Satire*, (Chicago), pp.304-5
14. S. B. Kendle, *The Ancestry and Character of the Skeltonic*,

- (Wisconsin) p.139 cited in Fish's *John Skelton's Poetry*, p.256
15. M. Pollet, *John Skelton; Contribution à l'Histoire de la Pré-renaissance Anglaise*, (Paris), p.50
 16. *Ibid.*, p.192
 17. S.E. Fish, *John Skelton's Poetry*, (New Haven), pp.240-261
 18. *op.cit.* p.163
 19. Pollet, *John Skelton*, p.50 note
 20. O. T. Myers, "Encina and Skelton", *Hispania*, XLVII, 1964
 21. Edwards, *Skelton*, pp.86-89
 22. Fish, *John Skelton's Poetry*, p.258
 23. See N.F. Blake, *Caxton and his World*, (London, 1969)
Selections from William Caxton, (Oxford, 1973)
 24. 当時の読者については, H.S. Bennett, *English Books and Readers, 1457-1557* (Cambridge, 1952)
 25. H.V. Routh, "The Progress of Social Literature in Tudor Times," *The Cambridge History of English Literature* (London, 1933), III, pp.93-129
W.F. McNeit, "Popular Literature and Social Protest 1485-1558" in *Studies in English Renaissance Literature* (Louisiana, 1962)
 26. "Phyllyp Sparowe" *The Poetical Works of John Skelton*, ed. Rev. Alexander Dyce (2 vols.; London: 1843) I, p.51 以下作品の引用はこの版による。以下Works と略す。
 27. "Colyn Cloute", *ibid.*, I, p.311
 28. "Why come ye nat to Courte", *ibid.*, II, p.26
 29. *A Replycacion agaynst Certayne Yong Scolers Abiured of Late*, " *ibid.*, I, p.206
 30. "The tynnyng of Elynour Rummyng" *ibid.*, I., p.95
 31. J.R. Lander, *Conflict and Stability in Fifteenth-century England*, (London, 1969), p.57
 32. "Vox Populi, Vox Dei. Mr. Skeltone, poete. To the Kinges moste Excellent Maiestie." *Works I.*, pp.400-413
 33. Nelson, *John Skelton, Laureate*, p.229
 34. "Phyllyp Sparowe" *Works* ll.774-783
 35. "Colyn Cloute", *ibid.*, ll.53-58
 36. "A ryght delectable tratyse vpon a goodly Garlande or Chapelet of Laurell, & c." *ibid.*, ll. 1533-47
 37. "Phyllyp Sparowe" *ibid.*, ll.801-803
 38. E. J. Sweeting, *Early Tudor Criticism: Linguistic and Literary* (New York, 1964), p.17
 39. Pollet, *John Skelton*, p.50
 40. N.C. Carpenter, "Skelton and Music: Roty Bully Boys," *Review*

- of English Studies. New Series, VI (1955), pp. 279-84
41. R. Graves, "The Dedicated Poet," Encounter, XVII (Dec., 1961), pp. 11-18
 42. E. Blunden, "John Skelton", T.L.S. 20 June 1929
 43. R. Hughes (ed.), Poems by John Skelton, (London, 1924)
 44. この二人の名はKinsmanの既出の論文にあげられている。 註11.参照。
 45. E.M. Forster, "John Skelton," in Two Cheers for Democracy (1951, pp. 135-53)
 46. Geoffrey de Vinsauf, New Poetics (1210) in Edwards' Skelton, "Introduction", §3
 47. "Colyn Cloute", Works I, p. 311, ll. 1-10
 48. "Elynour Rummyng", *ibid.*, I, p. 109, ll. 437-444
 49. "Colyn Cloute", *ibid.*, I, p. 347, ll. 930-941
 50. *Ibid.*, ll. 19-25
 51. "A Replycacion", *ibid.*, I, pp. 210-211, ll. 48-53
 52. 主要リズムは2拍であるが、拍の変化については、E. Spina, "Skeltonic Meter in Elynour Rummyng", Studies in Philology LXIV, 1967, pp. 665-684
 53. これは、全ての代表作品に見られると言っても過言ではない。
 54. See D. Davie, Articulate Energy: An Inquiry into the Syntax of English Poetry, (London, 1955) pp. 85-91
 55. "Phyllyp Sparowe" Works I, pp. 77-94
 56. "Why come ye nat to Courte?" *ibid.*, II, pp. 28-29 ll. 77-122
 57. J. Huizinga, The Waning of the Middle Ages (1925, Penguin Books reissued 1965), p. 268
 58. Edwards, Skelton, p. 23 エドワーズは、スケルトンをルネサンス人と定義し、ヒューマニストでもスコラ哲学者でもない、中間的な時期の典型として扱っている。
 59. Fish, John Skelton's Poetry
 60. *Ibid.*, pp. 245-248